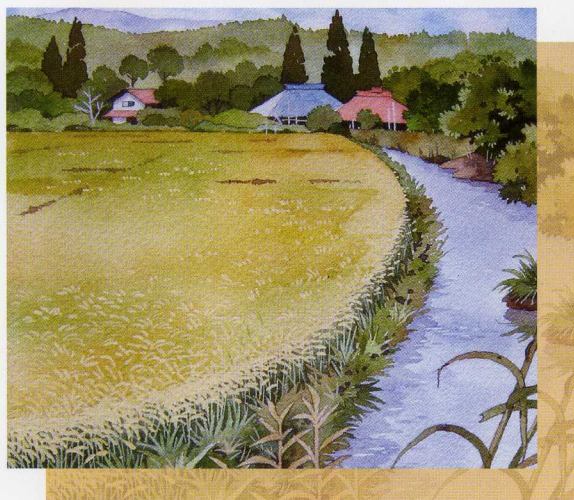
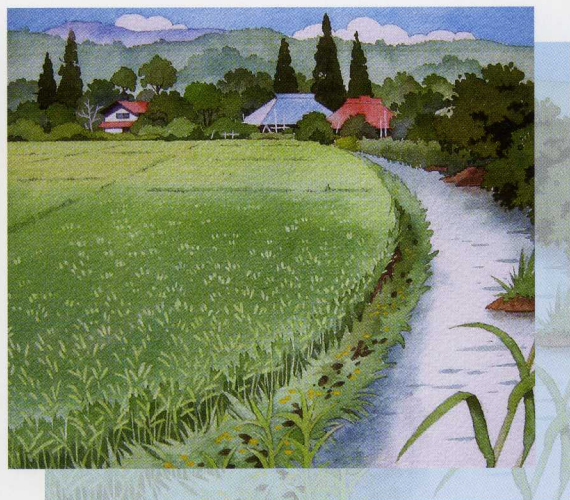


平成29年度  
喜多方市小学校農業科作文コンクール

# 作品集



喜多方市教育委員会

# 喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

## 発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長 芳賀 忠夫

本市小学校農業科の取組は、今や全国に知られるところとなり、今年度は、四月に朝日新聞の取材があり、五月には全国版「いま子どもたちは」において四回シリーズで紹介いただきました。また、作家の浜田尚子先生は出版された「田んぼに畑に笑顔がいっぱい」喜多方市小学校農業科の挑戦」で取り上げてくださり、全国からの反響も届いております。ほかに、全国の市町村議会や農業委員会五団体からの視察があり、子供たちの活動に称賛の声をいただきました。これもひとえに、各小学校農業科支援員の皆様や会津農林事務所を始め関係機関の皆様、県立耶麻農業高等学校の教職員・生徒の皆様や各小学校の先生方など、多くの皆様のご支援とご協力の賜物と心より感謝申し上げます。そして、十一年目を迎えた農業科の取組における子供たちの主体的に継続してきた活動があつてこそ、こうして評価していただいたものと思います。

福島県の農産物は、平成二十三年の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故以来の風評被害を脱しつつあります。これは、生産者を始め、県市町村、農業関係機関等の大変な努力の成果であり、県民の一人として喜ばしいことであります。そのような中、熱塩小学校で生産した米が、「第十九回米・食味分析鑑定コンクール国

際大会（小学生の部）」において、最高の食味であるという評価を受け、金賞を受賞しました。これは、熱塩小学校の取組の素晴らしさはもちろんのこと、本市農業科を代表しての受賞ともいえ、たいへん名誉あることとうれしく思います。同コンクールにおいては、本市からは昨年度まで豊川小学校が七度金賞受賞を果たし、今年度は熱塩小学校が三度目の金賞を受賞となり、喜多方市民だけでなく、福島県民みんなの大きな喜びでもあります。

さて、今年度で九回目を迎えた農業科作文コンクールには、市内全小学校の三年生から六年生までの児童から千四百六十一名の応募がありました。どの作品にも、体験したからこそ感じられる子供たちの気持ちが表れています。思うようにいかない悩み、苦勞して育ててきた作物を収穫する喜び、いのちを育ていのちをいただく感謝の気持ちなど、そこには、美しいもの、尊いものに気付き、感動する純粋な心があります。私たちは、その心に感動を覚えます。

結びに、ご多用の中ご寄稿いただきました関東学院大学教授の佐藤幸也先生、慎重に審査をしていただきました農業科アドバイザーの皆様にご心より感謝を申し上げますとともに、今後も喜多方っ子の豊かな心・社会性・主体性を育むことができますように、益々のご支援とご協力を賜りますようお願いいたしまして、発刊にあたつての挨拶とさせていただきます。

## 寄稿

### 「地球の遺産を学ぶ農業科と環境の世紀」



関東学院大学理工学部 教授 博士 佐藤幸也

#### 1 水田は命のゆりかご

日本列島は、北の海から日本海、太平洋、インド洋とつながる海に囲まれています。梅雨や台風、雪のようにアジア・モンスーンをはじめ地球の大気の影響と恵みを受けることで、四季があり、冷帯から亜熱帯まで、世界で最も変化と多様性に富んだ国土を持っています。広大な森林と、先人が耕してきた山裾や平場には水田や畑があり、それは海岸のすぐそばまで広がっています。まさに、「里山里海」の瑞穂の国です。

飯豊山系が優しく受け止めて喜多方の大地を潤す水は、会津の稲作を支えてきました。

そして、この水田には約六千種の動植物などが暮らしています。これほど身近に、地球に誕生した生命の多くと出会うことができるのは、世界的にも珍しいのです。日本の

水田は、動物園、植物園、水族館であり、農家の暮らしと共にある生命の歴史館です。

それをいかした農業を行っているのが喜多方です。喜多方の大地と水は、命のふるさと、ゆりかごなのです。この水田や畑、森林、川などで遊び、学ぶことは、地球と遊び、地球を学ぶことなのです。農業科は科学なのです。

#### 2 地球という命が脅かされている

私たちの身体は、地球の物質と家族や地域の皆さんの愛情でできています。その地球が化学物質や大量に捨てられるものに汚染されています。最も恐ろしいのは放射能汚染ですが、人類はこれを無くそうとしません。

田中正造は、「真の文明は、山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」と言いました。この思想は、二〇世紀後半、「地球環境サミット」でよみがえりました。人類は、環境の世紀によりやく入ったのです。地球という命の集合体を護るためには、世界中の協力が必要です。そこで、EUやカナダ、日本では、環境保全型農業に変わる努力をしています。農業や化学肥料を大量に使うと動植物の命が脅かされ、人間の健康も保てないからです。適切に使うことが大切ですが、米国は地球を破壊しながら農業をやり、日本にたくさん輸出しています。

### 3 命を守り大地を未来に引き継ぐ農業

皆さんが学習する水田は有機農業の場です。水田はダム  
の役割を果たし、酸素も米も生産しています。都会は水も  
空気も汚染され、農山村から送られなければ人々は生きて  
いけません。その人たちに、安全、安心と喜多方の愛情を  
届けています。

そのことを深く考えた、熱塩加納村の人々が中心になり、  
あらゆる人々が健康に、豊かに生きられる有機農業の郷と  
なりました。そして、喜多方は環境保全型の農業を行って  
います。このやり方は、江戸時代前半には既に確立してい  
ました。その代表、『会津農書』に書かれた「冬水田ん  
ぼ」方式は、佐渡の朱鷺を守る農法と村づくりに活用され  
ました。また、宮城県北の居久根（屋敷林）、水源から水  
を引いた用水路と、日本に来る冬の渡り鳥の約九割が越冬  
する水田や沼などのような、生きものと共生する農法、農  
村づくりは「世界農業遺産」となりました。会津の知恵と  
技術、思想が人類の宝物として世界に学ばることになった  
のです。皆さんが学んでいる農業科は、科学のフィールド  
なのです。

### 4 小学校農業科は最先端科学への道

小学校農業科というものは、実は世界が直面している問

題解決の最先端にある科学に裏付けられた思想（道徳・  
倫理）なのです。

白虎隊の生き残りとして日本初の物理学者、東京帝国大  
学総長になった山川健次郎を育んだ会津の風土と精神は、  
喜多方に受け継がれています。彼は会津の思いを受け止め、  
世界最高レベルの学問を学びましたが、農業科はその入り  
口に立つものです。扉を開けば、つまり、田んぼや畑に行  
けば、人として生きるあらゆるすべや知恵を学ぶことがで  
きます。支援員さんをはじめ多くの専門家が農業科を支え  
ています。高校生や農協、行政の方々が協力し合っていま  
す。そのような教科が、農業科であり、すごいことなので  
す。

他国を見ると、英国のナショナルカリキュラムと融合す  
る教育ファーム、カナダブリティッシュ・コロンビア大学  
のUBCファーム、ドイツやフランスでは学校教育と生涯学習  
が農村で行われています。農業科の学びは、世界の中心的  
学習の一つなのです。

いのちを育む農業科は、豊かな未来への道しるべなので  
す。

# 入 賞 作 品

目次

【大賞】

いただく命

熊倉小学校 六年 高畑 佑斗 12

大豆作り、カラカラが合図だよ

堂島小学校 四年 羽藤 夕愛 15

みんなが笑顔になった赤飯届け

熱塩小学校 五年 瓜生 香子 13

食べられることに感謝やをして

高郷小学校 三年 秋山 陽 16

より深く学んだ二年目

駒形小学校 六年 酒井 麻耶 14

## 【優秀賞】

本物のぜいたくとは

第三小学校 六年 目黒 陽路 17

農業と自然の関わり

加納小学校 六年 高橋 沙季 17

たねまきをしてめがでて食べられるようになったよ

第一小学校 三年 高橋 遥 18

大豆の力

豊川小学校 三年 齋藤 大希 19

食べ物にも「命」がある

山都小学校 四年 関口 空 20

心をこめて作った卒業証書

松山小学校 六年 遠藤 芽衣 21

農業から学んだ努力の大切さ

慶徳小学校 六年 佐藤 美心 22

大好きで楽しい農業科

姥堂小学校 六年 工藤 慎央 23

農業科学習を通して

松山小学校 五年 加藤 愛梨 23

虫のありがたさを知って

姥堂小学校 四年 須藤 瑠来 24

## 【農業科賞】

作物を作るとは

第二小学校 五年 佐藤 希美 26

たった一つの種から：

第二小学校 六年 松澤 菜々子 27

里芋家族は、大家族

第三小学校 三年 大塚 愛莉 28

協力と笑顔で農業を

第三小学校 六年 新井田 柚羽 28

おいしいきなができるまで

関柴小学校 三年 小関 春陽 29

私と農業

熊倉小学校 六年 鈴木 日菜 30

作って食べた野さいと米

熱塩小学校 三年 小椋 葉月 31

楽しかった農業

熱塩小学校 四年 山口 花音 32

農業の良さ

加納小学校 五年 原 未来音 33

農家の素晴らしさ

堂島小学校 六年 花見 紗和子 34

とうもろこしが育ったよ

駒形小学校 四年 芳賀 祐太 35

野菜を育てる中で一番大事なこと

第三小学校 四年 富山 優衣 35

種もみまきからだつく作業まで

豊川小学校 五年 吉田 椿 36

パープルスイートロードを育てて

駒形小学校 三年 五十嵐 結菜 37

感謝の気持ちから

第一小学校 六年 松崎 ことね 38

いただきますへの感謝

上三宮小学校 六年 大八木 諒 39

おどろきの連続、農業科

豊川小学校 四年 折笠 華子 40

農業科で学んだこと

豊川小学校 五年 新明 真央 41

私が思う農業科

熱塩小学校 六年 猪俣 美桜 42

農業科への思い

熱塩小学校 六年 瓜生 琉華 42

心にのこったじやがいも作り

加納小学校 三年 原 志穂 43

農業科で学んだこと

加納小学校 四年 岩下 春夢 44

あいさつには気持ちをこめて

塩川小学校 六年 五十嵐 和奏 45

農業の失敗と成功

駒形小学校 四年 大石 舞花 46

努力や苦労から生まれるおいしい作物

高郷小学校 六年 中島 千穂 47

たから物のじやがいも

第二小学校 四年 大森 和佳奈 48

手作業でやることの意味

関柴小学校 六年 穴澤 優斗 49

「いただきます。ありがとうございます。」

慶徳小学校 五年 長谷部 歩 50

大事に育てたジャガイモとの出来事

塩川小学校 四年 高畑 旬 51

ミミズのありがたみ

姥堂小学校 三年 船田 稀絆 51

編集後記

53

## 【大賞】



いただく命

熊倉小学校 六年 高畑 佑斗

「いただきます。」という毎日使っている言葉には、農家の人の苦勞、作物への感謝の気持ちがつまっているのだと思つた。こう考えるようになったのは小学校の農業科と友達達の作文のおかげだ。

一つ目のきっかけ、小学校の農業科では、いろいろな物を育ててきたが、今年育てたのは、スイカ、レタス、ネギなどの畑の手入れはめんどくさかつた。しかし、だんだんと作物が育っていく中、ぼくは、ふと、「作物がしっかりと育っているのに、育てている自分がしっかりとやらなくどうする。」と思え、苦勞しながら、自分なりに一生けん命育てることができた。

二つ目のきっかけである作文は、友達が少年の主張で書いた「つながる命」という作文である。そこには、自分の祖父母は、肉牛を育てるといふ命をつくる、命を育てる、命をつなぐ事と、いただきますという当たり前のように使っている言葉について書かれていた。その作文を読み、肉と野菜はちがうけれど、命をつくり、命を育て、命をつないでいくという事については、似ていると思つた。この作文を読み、作物は自分の命をぼく達に分け与えてくれて、ぼく達は、野菜だけではなく様々な存在によつて生かされているのではないかと考えるようになったのである。

ぼくは「いただきます」といふ言葉を食べ始めるといふ意味で使つていた。しかし、本当は、「作物をつくつてくださった人への感謝」「命を分け与えてくれる作物への感謝」を表わすことだと思つた。ぼくはこれから、作物とつくつた人への感謝をこめて言っていく。

「いただきます。」と。



## みんなが笑顔になった赤飯届け

熱塩小学校 五年 瓜生 香子

私の学校では、毎年一人ぐらしの人に、自分達で育てたもち米とあずきを使って、おいしい赤飯を届けます。それを、私達の学校では、「笑顔の赤飯届け」といいます。

私達は、もち米とあずきを植える作業から、収穫するまで全部やっています。

もち米は、全校生で植えました。ペアを作って、いっしょに植えていきました。

次に、稲と稲の間に生えた草を、田車で、一、二、一、二とドロにまぜていきました。

そして、いっぱいもち米の実った稲をかりました。私は、かまを使って気をつけながらかりました。

あずきは、種と種の間をちよつとあけながらやっていきました。あずきがいっぱいになってから収穫しました。それ

から、あずきとカラを分けるために、ふくろに入れて、いっぱいふみました。

もち米とあずきができたので、もち米とあずきを使って赤飯を作りました。赤飯作りには、おどろくことがたくさんありました。一回むして、水にさつとくぐらせてからもう一回むしたりしました。赤飯ができたら、パックにつめて、パックにつめた赤飯とごま塩をふくろにつめてから赤飯を配りに行きました。

配りに行ったときは、その人に手紙を読んでから赤飯をわたしました。私が手紙を読んでいると、おじいちゃんや、おばあちゃんは、ニコニコしながら聞いてくれました。そして、

「ありがとう。」

と言ってくれた時は、すごくうれしかったです。作ってよかったなと思いました。

学校にもどってから、赤飯を食べると、すごくおいしかったです。

自分達で育てたあずきともち米がおいしくなって、すごくうれしくなりました。そして、みんなが笑顔になれるように作れたのでよかったです。この活動がこれからも続くといいなと思います。



## より深く学んだ二年目

駒形小学校 六年 酒井 麻耶

今年も田植えをして、除草し、稲かりをしてお米を育てました。私達は五年生にも教える立場でした。例えば、苗植えでは第二関節までの深さや、除草ではおすときに思いっきりおすなどのアドバイスを伝えました。二年目だから、何でも知っていると思っています。しかし、農業科支援員さんに知っていますか？と聞かれても分からないことが実は、あったのです。

まず、なぜ苗は三本植えるのかです。そのことを知るために、苗の本数を一、三、十本に変えて植えました。稲かりの後に、稲の本数、米粒の数、稲や穂の長さなどを測りました。結果はおどろきでした。一本は二十九本に増え、百九十五粒でした。本数は二十九倍。三本は二十九本に増え、百三十五粒でした。本数は約九倍。十本は五十三本に

増え、百七粒でした。本数は約五倍。この結果では、本数が二十九倍になっている一本が一番よいという結果でした。では、なぜ一本がよいのに三本植えるのが疑問でした。一本は育てばすぐお米が取れるが、風でたおれてしまったり、虫に食べられてしまつて育たないかもしれないというところで三本植えるのが分かりました。だから、農業は、これまでの長い経験やデータなどをもとにして作物が作られていることに気づきました。また、毎年同じように作物を作っても農業は成功するとは限りません。なぜなら、水の量や気候などいろいろな変化が起こるからです。そんな中、条件を変えていって、作物がよく育つようにまわりの環境を見てそれにあつた世話をするのが大切であつて、とても難しいことだと思いました。

この二年間で、お米の大切さ、育てている人の苦労、楽しさ、うれしさ、いろいろなことを学ぶことができました。また、収穫祭で農業科支援員さんに感謝の気持ちをこめておいしくいただきました。全校生にたくさんのおかわりをしてもらえたので、よかったです。



## 大豆作り、カラカラが合図だよ

堂島小学校 四年 羽藤 夕愛

わたしたち四年生は、豆ふを作るために、豆ふ用の大豆を育てることにしました。失敗したら豆ふ作りができないというプレッシャーの中、大豆を育てていきました。

大豆はハトの好物なので、ぜったいに食べられないようにポットに種をまきました。ポットに土を入れ、人差し指の第二関節ぐらいまであなをあけ、二百この種をまきました。

くきが十センチメートルぐらいになってから畑に植えかえました。三人の支えん員さんに手伝っていただいたおかげで、五うねに分けて上手に植えることができました。しっかりと根づくまでみんなで水やりをしました。「どんなふうに大豆ができるんだろう。」と、とても楽しみでした。

夏休みの間にぐんぐん育ち、かれるまで待ちました。さ

やをふって、中の大豆が「カラカラ」と音をたてるぐらいまでかんそうをすれば、いよいよしゅうかくです。

しゅうかくの時、さをふってみると、本当に「カラカラ」という音が聞こえました。わたしは、まるで大豆が「今だよ。」

と合図をしてくれているような気がしました。

わたしには、大豆の声が聞こえたような気がします。大豆が生きているんだと思いました。

中の大豆を取り出すには、みんなでいろいろな方法でためしました。わたしは、せんたく板に大豆をこすりつけて取り出しました。取り出した大豆はとてもきれいでした。やつと会えたという気持ちになりました。

その後の選別作業も豆ふ作りも大変でした。初めは簡単にできると思っていたけれど、手間がかかりとてもむずしかったです。

でも、自分たちでしゅうかくした大豆で、みんなで協力して作った豆ふは特別おいしかったです。わたしは、大豆や豆ふが苦手で、今までさけていた食べ物でしたが、この大豆作りをきっかけに食べることができるようになりました。とってもうれしかったです。



## 食べられることに感謝やをして

高郷小学校 三年 秋山 陽

ぼくたちは、農ぎょう科でミニトマトとえだ豆とポップコーンと、里いもとキュウリを育てました。

まず、野さいの種をまいたり、なえを植えたりしました。種やなえをやさしく持つて、

「おいしくなつてね」という気持ちをかめて植えました。

その後は、毎朝、水やりをしました。三人ずつの組の当番を作つて、忘れないようにがんばりました。

少しずつ野さいが大きくなつてきました。葉の形や数や大ききなど、よく見てかんさつカードに書きました。野さいがどんどん育つていくのを見ると、ぼくもうれしくなりました。

野さい作りのほかに、キュウリ農家さんの見学にも行きました。大きなビニールハウスにたくさんのかぶりのキュウリが

なつていました。毎日水やりをしたり、しょうどくをしたり、こやしをくれたりして、一生けんめい手いれをして、おいしくなるように工夫していることが分かりました。一つの種から、百五十本ものキュウリが取れることにおどろきました。

自分たちで野さいを育てて分かつたことは、いつも食べている野さいがおいしく食べることが出来るまでには、水をあげたり、たくさんのかぶりの手入れをしたりして、とても大変だということです。

また、野さいが大きくなる様子を見たり、収かくしたり、みんなで食べたりすることがとても楽しいということも分かりました。

ぼくのかの食事のあいさつは、

「食べられることに感謝やしていただきます。」

「食べられることに感謝やしてごちそうさまでした。」

と、言うことにしました。家族も

「その気持ちは、とつても大切だね。」

と、言つてくれました。これからは、食べ物や農家の人たちや、お家の人たちなどへ、感謝やしながら食べ物をいただきます。

## 【優秀賞】

本物のぜいたくとは

第三小学校 六年 目黒 陽路

「本物のぜいたくは、レストランでおいしい料理を食べることではなく、自分で作ったものを自分で料理し、それを食べることです。」

農業科支援員の、山富士雄さんの言葉です。ぼくが今まで思っていたぜいたくとは、『おいしい魚や肉をたくさん食べる』ことでした。でも、山さんの言葉を聞いて、考えてみたらその通りだなと思いました。なぜなら、本当においしい野菜を作るのは難しく、それができた時に自分で食べるとうれしいからです。

ぼくはそれを今年実感しました。ぼくたちの班の大根や白菜が病気になり、食べられる大根が八本、白菜は二玉しかできませんでした。ぼくはそのことがあって、野菜って病気になるんだ、野菜作りって大変なんだなと思いました。それに、土の中にはねずみやもぐらがいるらしく、それらが野菜を食べてしまっていることもありました。収穫してみると、穴のあいているものや中が空洞になっているもの

もありました。本物のぜいたくをするには、ほど遠いなあと思いました。農業って本当に大変なことなんだなあとあらためて感じました。生き物（野菜や米）の気持ちを考え、水やりをしたり温度調整をしたりしなければなりません。今まで、上手に作った野菜を当たり前のように食べていた自分は、本当にぜいたくをしていたのだと思いました。

ぼくはこの六年間、米作りや野菜作りなどをしてきて、初めてうまくいかない農業を経験しました。里いもやにんじん、ねぎ、大根、白菜を育てて、じゃがいもやさつまいもより作るのが大変だと思いました。収かく祭では、食べられる大根や白菜を大切に調理しました。今年のいもには、かくべつにおいしかったです。小学校生活の最後に、本物のぜいたくを知ることができて良かったです。

## 農業と自然の関わり

加納小学校 六年 高橋 沙季

わたしは、去年からの二年間、有機無農薬栽培で、もち米を作りました。農業と自然の関わりについてはっと気付

いた事がありました。支援員は、山口さんと上野さんでした。支援員のお二人は、毎年春の種まきの時にいつも、

「いいか。有機無農薬栽培は、農薬を一切使わない。何もかも自分達の手で作ることをいうんだ。それに、自然環境がよくなるんだぞ。」

と言っていました。わたしは五年生の時には一体どういう意味なのか、全く分かっていませんでした。今年、全農の方に教えていただきながら水の生き物調査を夏と秋の二回行いました。そこではコオイムシやサワガニなど、都会では見られないという生き物をたくさん見つけることができました。また、全農の方のお話からこれだけの生き物がいるのはめずらしいということも分かり、加納の環境の良さを感じました。そして五年の時は全く気が付かなかった事に、六年になって初めて気が付きました。今、わたし達が農業を行っていないければ、今夢中で多くの生き物を観察することは出来ていない、と。

つまり、自然や環境がいいのは、農業をしているからこそだという事です。支援員のお二人が、

「自然環境がよくなるんだぞ。」

と言っていたのはこの事だったのです。五年の時にあまり考えなかったこの言葉は、農業と自然環境が深く関わって

いるということだと分かりました。

わたしは、山口さんと上野さんのあの言葉の意味に気付けなかったら、もち米を作っただけで終わっていました。

わたしは、農業と加納の環境についても気付かせてくれた支援員のお二人にとっても感謝しています。

わたしの家では農業をしています。家の手伝いをしつつ、環境を整えて加納がいつまでも生き物にとって住みやすい場所であるようにしていきます。

たねまきをしてめがでて食べられるようになったよ

第一小学校 三年 高橋 遥

わたしは、のうぎよう科のじゅぎようで大豆を育てました。そこではじめにやったのはたねまきです。ひとさしゆびをかるく土の中に入れて、たねを二つぶ土の中に入れるのですが、たねのすきまにも気をつけないといけなかったのです、みんなでかくにんしあいながらやりました。

大豆は育つのが早いので二、三日くらいで小さなめが出ました。たくさんめがいつきに出たので、そこにぜんぶ

水をやらなくてはいけないのでとても大へんでした。水やりをするのも「今日はだれの番だろう。」となつてしまい、大こんざつです。また、畑にうえかえてかんさつするときも、黒いシートのようなマルチをはるのですが、それをカッとするのも力を強く入れなくてはいけないので大へんです。

めが育ち、ようやく大豆らしくなってきたのですが、まだ実はぺちゃんとしていて食べられません。ここではじめて分かったことですが、えだ豆はふさがいくつかいっぱんに集まって育つということです。ぎやくに分からなかったことは、どうして豆のからにふさふさの毛が生えているのだろうということです。調べてみると、理由は二つあり、一つは、とうどが高いので虫からねられやすいのです。それで、自分を守るために毛が生えていることが分かりました。二つめは、十分な水分をたくわえるために毛が生えているということです。りっぱなえだ豆になるには水分がひつようです。

大豆を育ててみてわたしが感じたことは、ひつしに生きているということです。生きるためのひつようなかんりをしっかりしなければ、大豆もしんでしまいます。ちゃんと育てたその命をわたしたちが食べることで、わたしたちが

育ち生きていけるということを学びました。

## 大豆の力

豊川小学校 三年 齋藤 大希

ぼくは、六月二十日になつとう用の小すず大豆とえだ豆用のひでん大豆のたねを植えました。

育てている間に、水をやったり草をとったりしてどんどん大豆が大きくなっていました。そして、せわをつづけていると、大きな台風が日本にやってきて、ぼくは、大豆は大丈夫かな、と思ったけれど、台風が去ってから見に行ったら、元気でも大きく育っていました。その時、ぼくはとてもうれしかったです。その日から数週間ぐらいたった時、今度は大雨がたくさんふってそれが何日かつづいてしまいました。ぼくは、たおれていないかな、と思いました。大雨がやんで晴れた日、見に行ってみました。前よりとても大きく育っていました。ぼくは、思わず、「よかったあ。」と言いました。

その時ぼくは、植物にも人間と同じように命があつて、植物の命はとても強いんだと、分かりました。

大豆をまいてから三か月がたつて、えだ豆パーティーを開きました。自分たちで育てたので、とてもおいしかったです。なつとう用の大豆は、まいてから五か月後、なつとうにして食べたら、とてもネバネバしていておいしかったです。

そして、なつとうを家の人にも食べてもらったら、

「とってもねばりが強くておいしいよ。」

と言われたのでとてもうれしかったです。えだ豆の時も、

「とても味がこくておいしいね。」

と言われてうれしい気持ちになりました。自分で食べてみると、自分たちで育てたのでとてもおいしかったです。

植物の力って、とてもすごいと思いました。大豆は、台風に負けなかったです。また育ててみたいと思っています。今度は、四年生になるので、ほかの野さいも育てられるようにがんばりたいと思います。

## 食べ物にも「命」がある

山都小学校 四年 関口 空

「野菜を育てるのは楽しい。」ぼくは、野菜を育てる時、三年生まではいつもこの気持ちしかありませんでした。

ぼくは、楽しい気持ちさえあればいいと思っていました。もちろん、その気持ちも必要だと思います。けれど、四年生になってトウモロコシの種をまいている時、なぜか、急に「大切に育てよう。」と思いました。好きな食べ物でもないし、そんなこと一度も思ったことがなかったので、どうして急にそんなことを思ったのかとても不思議でした。その後、ぼくは、「農業はべつに得意でもないのに、なぜ楽しくできるんだろう。」とまた不思議に思いました。草むしりは暑くてめんどくさい時があるけれど、楽しくもありました。草むしりを何度も、何度も続けて夏休みになり、トウモロコシの収穫のとききました。

収穫したトウモロコシは、小さかったけれど、ものすごくおいしかったです。ゆっくり、味わって食べました。ぼくは、「なんで、農家の人は、暑くても、毎日野菜の世話をしているんだろう。」と、食べながら思っていました。

二期が始まって、少したった昼休みに図書館へ行きま

した。そして、ぼくは、「野菜は生きている」という本を見つけました。ぼくは、この表紙を見ただけで、今まで不思議だったことが一しゅんで不思議ではなくなりました。

トウモロコシの種まきで「大切に育てよう」と思ったことや、草むしりが楽しく感じたことや、農家の人が暑くても毎日世話をしていたことがなぜだか、やっとわかりました。それは食べ物にも「命」があるからです。そのことがわかった時は、とてもすつきりしました。

ぼくも、今度何かを育てる時は、何にでも「命」があると思つて、楽しくがんばろうと思います。そして、一生けん命に大切に育てていきます。

## 心をこめて作った卒業証書

松山小学校 六年 遠藤 芽衣

松山小学校では、六年生が卒業証書を自分たちで作る伝統があります。そして、今年も六年生二十人で卒業証書を作りました。

卒業証書は「コウゾ」という木を使って作ります。私た

ちは、その木を切るところからやりました。コウゾを切った後、「押し切り」という道具を使つて木の長さをあわせました。押し切りは、理科で勉強した、てこの原理を利用した道具だそうです。次に、コウゾの皮むきと、すべ取りをしました。皮むきをしている時、さつまいものような甘いにおいがしました。すべ取りは、包丁でいいねいにやりました。すると、農業支援員の方に「きれいすぎる。」と言われました。うれしかったです。その後、すべ取りした物をにて、やわらかくしたあと、木の棒でたたいて、繊維をほぐす作業をしました。うでがいたくなるほど、一生けんめいやりました。

十一月ごろから作りはじめて、ほとんど外での作業だったので、寒さにたえながら二十人全員で協力して、真っ白な卒業証書を作ることができました。

私は、農業支援員のみなさんが、私たちが見ていないところで、きれいな卒業証書を作るために、たくさんの方を苦勞をしていたことが分かり、農業支援員のみなさんには、とても感謝しています。

このように、何かを作る、育てるということは、どこかで、だれかが苦勞することだと思ひます。その人に感謝する気持ちを忘れないためにも、これから、卒業証書を自

分たちで作る伝統を受けついでいつてほしいと思います。

私は、卒業証書を作り、仲間と協力すること、お世話になった人に感謝をすることの大切さを学びました。

## 農業から学んだ努力の大切さ

慶徳小学校 六年 佐藤 美心

「わたしは、みなさんと同じ六年生のころに、お父さんを亡くして、喜多方で一番の農家になるという夢を持ちました。」

これは、農業支援員の山内さんがおっしゃった言葉です。山内さんは、お米や慶徳玉ねぎを中心に育てている農家の方です。慶徳玉ねぎというのは、慶徳町の伝統野菜です。小学校でも、昨年から山内さんにいただいた苗で慶徳玉ねぎを育て始めました。最初は十センチメートルくらいの弱々しい小さなものでした。しばらくしてから肥料をあたえ、ていねいに育てました。雨が降り続く日には（育っているかな。）と校舎からながめる時もありました。そんな心配をよそに玉ねぎは日に日に大きくなり、収穫の際には、

野球ボールよりも大きくなりました。乾燥させたあといよいよ試食の日が来ました。私は、ていねいに皮をむき、真っ白でつやつやの玉ねぎを手のひらにそつとのせ、一口かぶりつきました。（甘くて果物みたい。）私は、とても瑞々しく、甘い玉ねぎにおどろきました。心を込めて育てた玉ねぎは格別な味でした。

山内さんは、このおいしい玉ねぎを使って、ドレッシングなどを作り、商品開発をしています。私達も、自まんの伝統野菜をたくさんの人に知ってもらおうと、手描きのポスターや広告を作ったり、玉ねぎの日を考えたりしました。これをきっかけに、買ってくれる人が増えたらうれしいです。

私は、この慶徳玉ねぎづくりや、山内さんとの関わりを通して努力することの大切さを学ぶことができました。山内さんは今も夢に向かって努力し、今、六次産業化などにも取り組んでいます。そして、大きな農業をやっています。私にも今、絶対に叶えたい夢があります。その夢を必ず叶えるために、山内さんのように夢に向かって日々努力を続け、いつか夢を叶えられるようにがんばります。

## 大好きで楽しい農業科

姥堂小学校 六年 工藤 慎央

ぼくは、農業科が大好きです。なぜなら、手間をかければかけるほどおいしい野菜が実るからです。植物は、水をあげないとかれてしまいます。水やりは朝のうちにたっぷりとやります。なぜなら昼の時間は気温が高くなり水も熱くなってしまうからです。また土作りや草むしりも大事な作業です。土には牛ふんや肥料などを入れて、栄養たっぷりの土を作ります。草むしりは、他の植物に栄養がいつて、農作物に栄養がいかないということを防ぐためです。また、畑にいる害虫のすみかにもなってしまうのを防ぐためでもあります。そうして作った野菜はいつも以上においしく感じられるし、日に日に大きく立派に育っていった野菜を収穫するのは、とても嬉しいものです。このようなことをぼくは農業科の学習で学びました。

そして、今年、新たに支柱の棒と棒を強く結ぶ方法を支援員の先生に教えてもらいました。おかげで、今年は暴風雨でとばされたり、作物が地面についてしまったということがありませんでした。今まではたおれたり取れたりしていた支柱が、結び方一つでこんなにも丈夫なものに変わ

るのだと初めて知ることが出来ました。

そのこともあって今年のトマトはとても立派に育ち、収かくもしやすくなりました。収かくしたトマトを家に持ち帰ると二才の妹が

「おいしい。」

と言いながらいっぱい食べてくれました。その笑顔を見て、苦労して作って良かったと心から思い、嬉しい気持ちになりました。この時ぼくは、農家の人も食べた人の笑顔が見たくて心をこめて作っているのかなと思いました。「手をかければかけるほど、作っている人の気持ちがかかるかのようにおいしい野菜が出来る。」これがぼくが、大好きな農業科で学んだことです。

## 農業科学習を通して

松山小学校 五年 加藤 愛梨

今年の農業科の学習で私達五年生は、大豆と落花生を作りました。ふだんスーパーに行けば簡単に手に入る物ですが、実際自分達の手で作物を作る事の大変さは、この学習

で少しずつ分かってきました。

今年の落花生では、夏の暑い時の草むしりで落花生の葉と草が似ていて間ちがって抜いてしまった人もいて、ここでもまた作物を育てる事の大変さが少し感じられました。大豆に関しては、しゅうかくした後大豆を取るのに豆のカラをかんそうさせないといけない事をお母さんから聞いて知りました。作物を作る前の畑をたがやすのにクワを使いますが、それも見ている時はとても簡単そうでしたが、実際やってみると思っているようにはいかず、そこでもまた大変さを感じました。

農業科の話をした時、お母さんからも農業の大変さをたくさん聞く事ができました。米作り、野菜作りどれも大変重労働で、お母さんの実家ではひいおばあちゃんがインゲンを農協に出荷していたので、毎朝うす暗い四時位から夕方まで畑仕事をしていたそうです。だから休日や学校から帰ってくると、畑に肥料運びや水やり等のお手伝いをするのが当たり前だったそうです。その大変さを知っているからなのか私によく、

「作った人の事を考えて、感謝の気持ちを持って残さないで食べなさい。」

と言います。私は野菜が苦手という事もあり、以前は給食

も残していました。この学習を通して少しずつその大変さが分かってきたので、今では食べられる野菜も増え、妹にもその事を今度は私が教えています。

この学習を通して、食べ物があふれる今の時代だからこそ、作物を作り育てる事の大変さやその苦労を学び知る事によって一人一人が感謝の気持ちを持ち、食べ物を大切にする事が食品ロスの問題改ぜん等にもつながっていくのではないかと改めて感じ学んだように思いました。

虫のありがたさを知って

姥堂小学校 四年 須藤 瑠来

「また虫と会わなきゃいけないのか。ああ、やだなあ。」

とわたしは思いました。農業科の時間です。わたしは、虫が大きらいなのです。いつも虫が出てくると、「キヤー。」とおどろいてしまいます。シャベルで一回ほるだけで虫がたくさん出てくることがあります。だから、農業はきらいなのです。

「なんであんなに虫がいるんだろう。黒いシートがしいて

あつて、温かいからかなあ。」わたしは、そう考えました。「虫がたくさんいるのに、あれ、なんでこんなに野菜が元気に育っているんだろう。虫に食べられてしまわないのかな。」とも考えました。「あれ、もしかして野菜が元気なのは、虫のおかげなのかな。虫が土をきれいにしてくれたからかな。」次々に質問がうかんできました。

わたしは、喜多方の農業科の本で調べてみました。すると、意外なことが書いてありました。例えば、フトミミズは土の中にすを作って生活していて、細くなった落ち葉をまわりの土といっしょに食べ、フンを出してとてもきれいな土にしています。また、ミミズが動くと、すきまがあり、空気がよく通り、植物が元気に育つそうです。ダンゴムシも同じです。えいようのあるフンを出すので、とてもいい土になります。ダンゴムシにた、ワラジムシという虫もいます。これらの虫のおかげで、わたしたちの食べる野菜は、元気に育っているのです。

わたしは、今年初めて虫の大切さが分かりました。虫がきらいでしたが、虫のことを知ったら、かわいく思えてきました。来年の農業科が楽しみになりました。



## 【農業科賞】

作物を作るとは

第二小学校 五年 佐藤 希美

「どろどろになるの、いやだね。」  
「何だか、面どうくさそうだね。」

五月の五年一組の教室では、そんな声がどこからともなく聞こえてきました。今日は、農業科の田植えの日です。私達五年生は、今、農業科でお米を育てるのです。毎日ご飯を山もり食べる私は、お米を育てることが楽しみでしたが、「大変そう」「面どうくさい」という言葉を聞いていると、自分もそんな気持ちになってきました。みんなの言葉通り、田植えの作業は、簡単ではありませんでした。小さな苗を三本ずつ、きちんと線に合わせて植えていきます。私は、苗を一本ずつ植えるのかと思っていたので、おどろきました。小さなたばを三たばぐらい植えましたが、ずっと前かがみになって、中腰でいたので、体中がいたくなりました。「やっぱり、お米作りは大変だ。」

そう思いました。でも、田植えが終わった後の田んぼを見てみると、真っ黒でどろどろしていた田んぼが、かわいい

緑色の苗がきちんと整列しているように見えて、とてもかわいく見えました。

「早く、お米が食べたいな。」

田植えが終わったばかりなのに、そんなことを思っていました。

一学期、支援員の方々のお話を聞きました。

「お米は、八十八の手間がかかるんですよ。」

この話を聞いて、田植えをしただけで喜んでいた自分が、はずかしくなりました。田植えをするまでの田んぼの準備や、苗に育てるまでの準備、植えてからも、天気や気温によつて、様々な作業があることが分かりました。祖母は、いつもお米を一つぶも残してはいけないと言います。一つぶには、農家の人達のたくさんのおいがかめられているからだと思います。

私は米作りを通して、作物を作り育てることの大変さ、その命を感謝していただくことを学びました。今日もおいしくいただきます。



たった一つの種から：

第二小学校 六年 松澤 菜々子

今年の農業科で取り組んだ作物は、主に、じゃがいもと、長ねぎでした。

じゃがいもは、一人一個ずつ穴をほって植えました。去年は、たねいもを丸ごと植えたのですが、今年は、半分に切ったのを植えました。このような状態で植えて大じょうぶなのかなと思いました。

今年は雨が多く、じゃがいもよりも草がのびそうでした。それで、何度も草むしりをしました。そのせいか、じゃがいもは、見るたびに成長していききました。

長ねぎは、今年初めて取り組んだ作物です。

植える時は、ねぎなのに白いところが全く無いまるで緑の草のようなものだったので、びっくりしました。これが本当に、あのねぎになるのか信じられませんでした。すると、先生から、ねぎは土寄せというのをして日に当たらない部分が白くなっていくというのを聞いて納得しました。

また、じゃがいもは、うねの上の方に、ねぎは逆にうねとうねの間にねかせて植えるということも初めて知りました。

何日かすると、ねかせて植えたねぎが、空に向かって起き上がっていました。

土寄せは、一回目は全員で、二回目、三回目は飼育栽培委員がやりました。土寄せをするたびに、あの草のようだった苗がどんどんねぎらしく、鬼の金棒のように太くたくましくなっていました。

収穫したじゃがいもと長ねぎは、みそ汁やサラダにして食べました。自分達で育てたと思うとより一そうおいしく感じました。また、たった一つの小さな種をこんなに大きく育ててくれる土の力はすごいなあ、と思いました。

「まかぬ種は生えぬ。」ということわざがありますが、私も、心の中に何か一つの種をまいて育てていきたいと思いました。

畑の作業をいつも私達以上に一生けんめいに手伝ってくださった皆様ありがとうございました。農業科は、とても楽しい授業でした。



## 里芋家族は、大家族

第三小学校 三年 大塚 愛莉

わたしは、五月九日に里芋を植えました。とても楽しみにしていました。

わたしは、何日かたって畑に行ってみると、チューリップのめのようなものが土から顔を出していたのでびっくりしました。そして、里芋は、どんどん大きくなってわたしのせをぬかしていました。こんなのにびるなんてすごいと思いました。

葉っぱをよく見るとトトロに出てきたかさのようです。雨がふると葉っぱの中で水玉がたくさん転がっていてきれいでした。葉っぱには、いも虫がいました。いも虫は、おいしそうに葉っぱを食べていました。いっぱい食べられるのは、こまるけど、虫たちにも葉っぱのえいようをわけてあげてもいいな、と思いました。

十月三十日、ついにしゅうかくです。松の子ファミリーのみんなで里芋をほるので楽しみにしていました。にんじんは、根もとからひっぱってかんとんにぬけますが、里芋は、スコップやくわでほらないとぬけません。大智くんがスコップで土をほりました。わたしは、くわを使って里芋

をきずつけないように土をほりました。そして、ようやく里芋が見えてきました。こうすけくんがいつしようにん命ひっぱったけれどなかなかぬけませんでした。だからみんなでいつしよにひっぱるとやとぬけました。土からとり出してみると、すぐたくさんの里芋がありました。数えてみたら四十こぐらいありました。親芋のところに子芋がついて、その先にまご芋がついていました。里芋は、大家族で土の中は、にぎやかそうに見えました。

わたしの家でも里芋を作っていますが、土の中の里芋のようすは、初めて見ました。里芋をたね芋からしゅうかくまで作れたので、うれしかったです。

わたしは農学科し援員さんたちに里芋の植え方を教えてもらって、おいしい里芋ができてうれしかったです。

## 協力と笑顔で農業を

第三小学校 六年 新井田 柚羽

わたしは、農業は生活する上で一番基本となることだと思いました。それは、食えるということは、「生きる」と

いうことだからです。

米や野菜を作るには、小さな種や苗木から育てていかなくてはなりません。野菜も生き物なので、わたしたちが毎日ご飯を食べるように、肥料をあげたり水をあげたりしなければ、栄養たっぷりの大きな野菜には育ちません。しかも、野菜にもいろいろ種類があつて形や色や味がちがうので、育て方もいろいろ工夫をしながら育てていかななくてはなりません。このように、農業というのはとても手がかかり大変なことです。一つ一つの農作物がわたしたちを大きく育て、わたしたちの元気のみなもとになっているのです。また、おいしい作物はわたしたちを一番笑顔にしてくれます。笑顔でおいしいものをたくさん食べることができ、食べることの楽しさや農業の楽しさを味わうことができます。このように、わたしたちの命を支える農業も、一人で行ったのでは意味がありません。みんなで協力し合つて農業をすることに意味があるのだと思います。いっしょに種をまいて水をやり、収穫すること、農業の喜びが何倍にもなります。今年は、大根やにんじん、ねぎや白菜などの野菜を初めて作りました。これらの野菜を使って、収穫祭の時にみんなでものを作りました。食べている時に、おわんの中の野菜一つ一つに育てた時の思い出があることに気が

がつかしました。そして、感謝しながら食べるこの意味が理解できたような気がしました。支援員さんが、「自分たちで作った野菜を食べることが本当のぜいたく。」

と言ったのは、こういうことなのかなあと思いました。農業科を学習した六年間で、農業の大切さを感じることができました。これからも農業を大事にしていきたいと思っています。

おいしいきなこができるまで

関柴小学校 三年 小関 春陽

私は、大豆を作り、しゅうかくして、きなこを作りました。

はじめは、しえん員さんがたがやしてくれたところに、たねをまきました。まくのは、かんたんだと思っていたけれど、あまり、ふかすぎても水をあげた時にでてこないのダメ、あさすぎると、水をあげた時に流れてしまうのダメと、ちょうど良いバランスにして、まかなければいけ

ないので意外とむずかしかったです。まき終わった後、先生が、

「これから、大変なこと何ですか。」

と聞きました。すると、しえん員さんは、

「草むしり、草とのたいけつかな。」

と言っていました。それを聞いて私は、草とのたいけつに勝っておいしい大豆を作りたいと思いました。

七月の末ごろ、私たちは、朝のボランティア活動のときに畑の草むしりに行きました。畑につくと、ものすごく多くのざつ草が生えていて、どれが大豆か分かりません。なので、これはぜったいざつ草と分かるような草しかぬきませんでした。でも、じょじょに大豆が大きくなって分かるようになり草が見分けられるので、ざつ草も少なくなりしました。草むしりをつづけていくとおいしそうな大豆ができました。

いよいよ、きなこ作りです。きれいな大豆と、きずのついた大豆のしわけをしました。百こい上の大豆のしわけはとても大変です。見落とさないように気をつけて、一こずつやっていました。石うすできなこにするさぎようも大変でした。思ったより体重をかけて回さなければならなかったので、一度にけつこう力を使うので大変でした。

おいしい大豆を作るまでには、たくさんの仕事があります。小さなきなこを作るには、たくさんの人がかわり、くろうがありました。きなこの一つ一つに入っているあいじようを知ることができてよかったと思いました。

## 私と農業

熊倉小学校 六年 鈴木 日菜

私は学校の行事の中で、秋のいも煮会と収穫祭を毎年とても楽しみにしています。みんなで作った野菜を使った料理を食べると、育てた時を思い出します。

春の暖かな日に田植えをして、どろがかかって友達と大笑いしたことや植えた稲がみるみる緑一面の田んぼになっていったこと。支援員さんに教えて頂きながら畑に黒いビニールをはった時は汗がポタポタおちました。

夏の暑い日に、友達と畑に草むしりに行ったら、虫に刺されて足がはれたり、草をむしろうとしたらとつぜん大きなムカデが出てきてみんなで大きな声を出してしまったりもしました。

夏休みのプールの帰りに、大きくて重いスイカを収穫して運んだ時は、落としそうになってあわてましたが、先生に切って頂いて、みんなで食べた時の甘くてみずみずしい味は忘れられません。

秋はいよいよ収穫の季節です。カマで稲刈り体験もしました。夢中になって刈っていると腰が痛くなりました。

収穫祭で食べたお米は一粒一粒が光り輝いていてとてもおいしかったです。自分たちが作ったという思いが詰まったお米です。

支援員さんに協力して頂いて、友達と力を合わせて育てる農業科は、すばらしい思い出いっぱいです。

私の家も農家なので祖父母から農業の大変さ、すばらしさは聞いてはいましたが、自分が小学校生活で農業を体験し、少しはわかったような気がします。

この農業体験は、私の人生の財産になりました。これから生きて行く中で、一人では無理な問題があっても農業科で経験したように友達と協力したり一緒に考えたりして行動したいと思います。

そして、これからも家の農業の手伝いをたくさんしていろいろ教えてもらいたいです。

## 作って食べた野さいと米

熱塩小学校 三年 小椋 葉月

わたしたちは、うつのかぶ、だいこん、かぶ、えだ豆などを育てました。一番さいしょに三・四年生でしゅうかくしたえだ豆はずんだあんにしました。（どんな味になるのかな。）と思いました。わたしはずんだあんといっしょに食べるおだんごを作るたんとうになりました。おだんご作りは家でやったことがあるので上手にできたと思います。できたおだんごといっしょに食べたずんだあんはとてもおいしくて、また食べたいと思いました。

次にしゅうかくしたのはうつのかぶです。うつのかぶはおみそするになりました。わたしはかぶは苦手だけれど、うつのかぶはだいじょうぶでした。ぜんぶおいしく食べることができました。

しゅうかくさいの時には、全校生で育てたもち米を使っておもちにして食べました。いねかりの時には学年ごとにやくわりぶんとんをして、三年生と四年生はいねのたばをひもでむすぶことでした。いねが首や手にさわるとちくちくして、思わず、

「すぐくちくちくしていたい。」

と言つてしまいました。でもさいごまでがんばりました。しゅうかくさいの時にはきなこもち、つゆもち、あんこもち、くるみもちになって、どれもおいしく食べました。家族みんなで、

「おいしい。」

と言いながら食べました。

のうぎよう科の学習ではじめて知っておどろいたことは、たねまきをした後に、もみがらをまくことです。木さくすというえきにひたしたもみがらを野さいの周りにまいておくと、虫がよつてこないのだそうです。そのえきはとてもくさくて、何度石けんであらつてもにおいがとれませんでした。ものすごくくさいので、虫の気持ちがよく分かりました。

いろいろなことを体けんできてよかったです。来年ももつとがんばつて、いろいろなことを知りたいと思います。

## 楽しかった農業

熱塩小学校 四年 山口 花音

わたしは、農業科でえだ豆、大根、カブ、大豆を育てたり、田うえやいねかりをしたりしました。その中の大根、カブを育てたことをしようかします。

授業のかねがなつて総合の授業が始まりました。わたしは、ドキドキしました。大根、カブの種をまきました。五つずつ植えました。わたしは、「冬じまん」という大根を植えました。種は、小さくて何だか、かわいく見えませんでした。楽しかったです。

その後、種をまいたところに、もみがらをまきました。農業支えん員のよしまささんが、

「もみがらは、虫のきらいなおいで、畑にまくと、虫が、よつて来なくなるよ。」

と、教えてくれました。わたしは「そうだったんだ。すごいなあ。」と思いました。しゅうかくのときに、本当に、虫が食べている大根やカブが少ないことに気づきました。すごいと思いました。すぽっすぽつとぬけました。わたしは、カブが苦手なので、こくふくしたいと思っていました。そんな時、三年生が、カブでおいしいおみそしるを作ってくれました。その中にはカブ、大根などが入っていました。わたしは、思いきつてカブをパクツと食べました。すると、とわくんが、

「みそしるオリンピックでゆうしようするんじゃないね。」

と言いました。本当にそのぐらいおいしかったです。みんな、おかわりもたくさんしました。わたしは、カブのつけものは苦手だけど、みそしるの中のカブは好きになりました。給食のかたづけの時に男子が、三年生に、

「ありがとう。おいしかったよ。」

と言っていました。三年生はうれしそうに、

「ありがとう。」

と言いました。それも全部、よしまささんたちのおかげだと思いました。あと二年間そして学校を卒業しても、農業を続けていきたいです。わたしは、農業が好きになりました。わたしはこの農業を大切にしていきたいです。

## 農業の良さ

加納小学校 五年 原 未来音

私は、いねの苗植え、肥料まき、田植え、三回の除草作業、いね刈り、脱こく、生き物調査をしました。その中で、私は自然、農業について考えたことが三つあります。

一つ目は、米をつくることの大変さについてです。私達が、行った米づくりは、一から全部の作業をしました。いねの苗植えは、一つ一つの作業が、とてもむずかしくて、とても大変でした。でも、まだ機械などがない時代は、一つ一つ手作業でやっていたと考えると、とても大変だったんだろうなと思いました。

二つ目は、農業をする大切さです。この米づくりをしなければ、田んぼにいるおたまじやくしなどの生き物は、いなくなってしまうです。だから、米づくりや畑の作業は、大切なんだなと思いました。それと、私達が農業をしなればみんなが食べる物がなくなってしまうということです。これからは、おばあちゃんが畑で作業をしていたら、自分から手伝うようにしたいです。

三つ目は、楽しさです。農業は、大変だったりもしますが、とても楽しいです。みんなで協力し合ってでき、五年生は、前よりもっとなか良くなれた気がします。そして、自然とふれ合うこともできると思います。

私は、この大変さについてと、農業の大切さと、楽しさの三つを知りました。これから家での手伝いや、六年生になつてからの、農業科の授業で、今年習ったことを生かしてやるようにしたいと思います。そして来年の五年生に、

今年ならったことを生かして教えてあげたいと思います。  
これからも、今年よりも多くの農業の楽しさを見つけていきたいです。

## 農業の素晴らしさ

堂島小学校 六年 花見 紗和子

私たちが住む喜多方市は、四季折々の風情が楽しめる自然豊かなところです。あたりは田畑や草花などで囲まれています。この事からも喜多方市は農業に適していると思います。

私が通う堂島小学校では、稲作・畑作の両方を行っています。農業科支援員さんの協力を頂き、毎年、田にもち米を育て、学年ごとに畑で野菜を育てています。

稲作では、昔ながらの方法で育てます。種まきでは、種を土に手でまきます。田植えでも、半分ほどは機械を使いますが、もう半分は全校生みんなと一緒に手で植えます。現代では、稲作はほとんど機械で行いますが、昔の方法で体験すると、昔の人々の大変さ・努力や工夫がよく分かります。

ます。稲の穂が垂れ、収穫した後、堂島小学校では収穫祭でおもちをつき、全校生・地域の方など全員で食べます。全校生が協力して育てた米は、とてもおいしかったです。

畑作では、私たち六年生は、ジャガイモ・枝豆・ロマネスコを育てました。まず、畑を耕して最初にジャガイモと枝豆を植えました。ジャガイモの収穫の時は、土をほると中にたくさんジャガイモが育っていておどろきました。枝豆は、くきにたくさん付いて一つずつ取るのがとても楽しかったです。ロマネスコは時々見ると日々成長していて、どの野菜も、植えた時から収穫するまで、水やりや草むしりなどをして元気に育っていったとてもよかったなと思います。

米や野菜は人間の力だけでは元気に成長しません。自然の力もあって農業ができる。私はそう思います。種は本当に小さいですが、人間と自然が協力すると作物はどんどん大きくなります。

私は、小学校六年間、農業を経験して、とても勉強になりました。昔の人の苦労、自然の素晴らしさ、農業の素晴らしさ、色々な事が分かりました。これからも農業の経験を生かして、何かにつなげたいと思います。

とうもろこしが育ったよ

駒形小学校 四年 芳賀 祐太

ぼくは、農業はとても大変だと思いました。どうしてそう思ったかというと、ぼくたちが農業科で育てたとうもろこし作りでそう思いました。

最初に、みんなでとうもろこしの種をうえました。土をカップに入れて指であなを開けて種をまきました。水を毎日あげるのは大変でした。じょうろを持って池の方に行つて、水をたっぷり入れて運ばないといけないからです。だけど、おいしいとうもろこしを食べるためには毎日水をあげないといけないからがんばりました。そして、やつとめが出たときはうれしかったです。

次に、とうもろこしのなえを畑にうえました。みんなでマルチをしいて、そこにあなを開けて、なえをうえました。それからまた、毎日水やりをしました。夏休み中も水やりをしました。すると、なえはどんどん大きく育っていきましました。

だけど、後ろの方は、なかなか大きく育ちませんでした。調べたら、前の方は太陽が当たっていたけれど、後ろの方は、木のかげになって、太陽があまり当たっていなかった

ことが分かりました。がんばって水やりをしてきたのに、残念な気持ちになりました。

夏休みが終わってから、とうもろこしをしゅうかくしました。太陽の当たっていたとうもろこしの実は、実がたくさんつまっていました。本当によかったと思いました。

このように、ぼくは、農業は、がんばってもうまくいかないことがあるので、とても大変だと思いました。でも、がんばった分、しゅうかくするのはとてもうれしいということも分かりました。

来年も、がんばって作物を育てたいと思います。今度は、太陽の光のことなどに気をつけながら育てていきたいと思っています。

野菜を育てる中で一番大事なこと

第三小学校 四年 富山 優衣

わたしたち松の子班の二班は、去年よりもたくさん作物がとれました。しえん員さんたちと育てた野菜は、大根、白菜などです。その中でも四年生だけで育てた野菜は、さ

といも、えだ豆です。他の学年の人たちもいろいろな作物を育てました。

今までたくさん野菜を育ててきて思ったことがあります。それは、野菜には、「命」があるということです。そう思った理由は、野菜は水がないとかれてしまい、えいようがないと大きく育っていきません。だから野菜を育てるということは、野菜の命を取りあつかうということなので、大切に育てないと、すぐかれて野菜の命がなくなってしまうということなのです。そのためしえん員さんたちは、野菜の命を大切にしていってとてもおいしい野菜が作れるんだなと思いました。わたしもこれから野菜の命を大切に育てれば、今まで育ててきたどの野菜よりも、もっとおいしくできるんじゃないかなと思いました。でも水だけでは、育ちません。野菜を育てるには、「日光」「ひ料」「土」などがあります。そのほかにも、土は固いと野菜は育ちにくいので、土がやわらかくなるまで、ならしてやわらかくしないといけません。だから野菜を育てるということは、とても大変でむずかしいということが分かりました。

わたしは、今まで野菜を育ててきて一番大事なことに気がつきました。それは、水や土、日光よりも、もっと大切なことです。それは、みんなと協力して行うことです。た

とえどんなに野菜を作ることが上手な人でも協力してやらないと、おいしい野菜を作ることはできないと思います。大変な作業をみんなで助け合うことが必要です。来年や再来年も、今まで知ったことを生かして、おいしい野菜を育てていきたいと思っています。

### 種もみまきからだっこく作業まで

豊川小学校 五年 吉田 椿

私が一年間の農業科の学習で一番おどろいたことは、稲がのびるのは速いということでした。最初にやった「種もみまき」で、あんなに小さかった種もみが、芽が出たと思ったらあつという間に大きくなり、稲になり、そしてお米になつていったことが、とても不思議でおどろきでした。

一年間の農業科の活動では、いろいろなことも知りました。「種もみまき」では、水はポタポタと黒い苗箱から出るくらいあげること、もみは塩水に入れ、しずんだものが実が入っていて、いい種もみだということなどです。やらなければ、ずっとわからないままのことを知ることができ

て、よかったと思っています。

また、いろいろな出来事もあって、楽しい体験もできました。みんなが楽しみにしていた「田植え」では、土がねちよねちよしていて、入った時の気分は不思議なものでした。入った人にしかわからない、なかなか味わえないものだと思います。土の温かさを感じました。「イオン水散布」では、ハプニングもありました。ホースを持っていた人たちが、ドミノたおしてみたいに、田んぼの中に入っているのを見てびっくりしました。でも、それもなかなか体験できないハプニングでした。

その後は稲刈りや脱こく、そしてできたお米をみんなでいただく収穫祭と、初めてのことばかりでしたが、すごく充実して楽しかったです。収穫祭で食べたおにぎりは、たぶん今まで食べたおにぎりの中で、いちばんおいしかったと思います。グループごとに協力して作ったとん汁も、ほつぺたがおちそうなくらいおいしかったです。

私にとって、農業科の学習でおどろいたことや知ったこと、そして友だちや只浦さんといっしょに体験したことは、大切な宝物になりました。来年も農業科の活動があります。今年金賞をのがしたけど、来年はまた、この一年の宝物を生かして、金賞をとりたいです。

## パープルスイートロードを育てて

駒形小学校 三年 五十嵐 結菜

「うわあつ、むらさき色だあつ。」

「きれいっ。」

なべのふたをあけると白いゆげがあがり、むらさき色のおゆが見えました。

今日は、みんなで育てたむらさき色のさつまいものしゅうかくをおいおいする日です。

わたしは、むらさきいもを育てて、二つのことを知りました。

一つは、さつまいもには、つよい力があることです。五月三十一日に、畑になえをうえた時は、葉は、二、三まいでした。一まいかればかっているのもあって、大じょうぶかな、育つかなと心ぱいしました。なえをうえてから毎朝、ペットボトルに水をくんでなえに水やりをしました。毎日つづけて水をやっていたら、ふなぞこうえをして横になっっていたなえが、空の方に向かって、ピンとなったのです。元気になったなと思えました。

夏休みが終わって、畑に行ってみると、もう畑の土は見えなくなっていました。つるが、となりの学年の畑までの

びて、大きな葉が数えきれないほどになっていました。水と土と太陽のおかげで、こんなのにのびたのだと思い、さつまいもの力って、すごいと思いました。

二つめは、自分たちで育てたさつまいもは、店で買った物よりおいしいことです。それは、毎日毎日、水をやって、草をとって、くろうして育てたさつまいもだからおいしいのかなと思ったのです。一本のなえが、ぐんぐん育って、一本のなえに、二から五本のいもがとれました。ふしぎな感じもしました。

むらさきいもがゆであがると、なべからいもを取り出して、つぶして、バターとはちみつをまぜました。味みをした時、いもだけでもあまくておいしかったのですが、バターとはちみつをくわえるともっとおいしくなりました。アルミカップにもりつけて、生クリームやクッキーをトッピングしました。

自分たちで育てたいもだから、ちょうりするのめわくわくして、楽しいとわかりました。



## 感謝の気持ちから

第一小学校 六年 松崎 ことね

「いただきます。」

最近、この声が大きくなってきた。自分でもそのことがうれしく思っている毎日だ。

ある日、農業科作文の話が先生の口から出た。そして、私は社会科の勉強で習った縄文時代の人々について思い出した。それは現代の人々が使っている物がなく、自然災害にあうたびに苦しみ、それによって争い、死んでしまう一説の話だ。そのことと比べてみたら今の日本はどうなのだろうか。大昔の人がなやんでいたことは今の電子レンジ、冷蔵庫、コンロなどになって私達の生活のすべとなっている。しかし、その事によって大昔の人々と現代の人々の感覚の差が生まれたのであろう。それは食べ物などに対する「感謝」の気持ちなのだろう。そう私が考えられるようになったのは農業の体験をしたからだ。

私は今まで毎日、一日三食があつて当然だと考えてしまっていた。そのせいもあつてか、好き、嫌い食べ物自分勝手に分けてしまっていた部分が多くあつた。しかし、私の考えは農業体験を通じて百八十度大きく変わった。こ

んなになえを育てるのが大変だということも、なえを植えて稲を刈る時はすぐこしがいたくなることも、味わってみなければ分らないことだらけだった。

最後にもう一度言うと、大昔の人々と現代の日々の感覚の差は感謝の気持ちだ。それを変えるには、子供達の考えを変えなければいけない。そのために頑張って努力をしてくれる地域の方々もいる。私達子供も何も出来ないわけではない。あの食べ物嫌いな子は、食べる時にあいさつを大きくしてやる気をだすとか色々な方法がある。今、私達の可能性は無限大だ。その一步を食べ物への感謝の気持ちにしよう。

「ごちそうさま。」

私は、ニコニコと笑顔で空っぽになった食器皿を見つめている。

## いただきますへの感謝

上三宮小学校 六年 大八木 諒

「いただきます。」

同級生のかけ声で、収穫感謝祭、略して収穫祭の会食が始まった。田んぼで育てた米で作ったおにぎりと上三宮小で作った野菜を入れ、我ら六年生と五年生で作った芋汁、さらには農業科支援員さんが作った漬物で会食した。

田んぼの活動の始まりは四月の種まきだった。米の種は、炊いた米と似ているような似ていないような感じだった。

五月に、田植えをしてから一月で、種から若々しい苗が顔をのぼしていた。筋引きをして、十字になったところに苗を四本ずつ植えた。命のたん生みたいで、とてもいい気持ちでした。その間にみんな先に行ってしまった。ぼくは、速くていねいに植えていった。

その後に田んぼに行ったのは、夏が過ぎ、秋真っ盛りの十月の稲刈りだった。植えた稲はどうなっているのだろうか。まさか、虫に食われていないだろうか。心配しながら田んぼに着くと、そこは、夕日が海に映った時のような感じだった。四つ角を鎌で刈ってからは、農業科支援員の鈴木さんがコンバインで刈った。コンバインから出てきた米つぶたちは、大雨の後に虹がかったようだった。

一方、畑では、五月にじゃがいもを植えた。種芋から大きく育つようにとぼくは願った。

十月に、じゃがいもをほった。願いどおり大きなものも

あったが、小さいものの方が多かった。

一週間後に白菜を植えたが、収穫祭までには三つしかできなかつた。

今、田んぼで作った米と畑で作った野菜たちが同じ食卓の上にならんでいる。作っている人、調理している人、その人たちに感謝して、ぼくは大声で言おう。

「いただきます。」と。

## おどろきの連続、農業科

豊川小学校 四年 折笠 華子

「今年はこづゆを作るのか。でも里いもはちよつと苦手だな。」

去年の納豆作り体験が楽しかったので、私は今年の農業科もとても楽しみにしていました。今年は会津の伝とう食、こづゆ作りにちよう戦です。そのため、ニンジンと里いもを育てることになりました。ニンジンはオーストラリア産の「アロマレッド」。バラのにおりがして食べるとフルー

ツのようにあまいそうです。里いもは苦手な私ですが、ニンジンも、聞いただけでワクワクして、食べるのが楽しかったです。またまたおどろきました。

最初の作業は里いもの芽出しです。種ではなく、もう食べられそうないもを土にうめたのでおどろきました。次にニンジン種の種をまきました。種は鼻息で飛びそうなほど小さいのです。こんな小さな種がニンジンになるのかと、またおどろきました。どちらも、夏の間の世話をみんなががんばったおかげで、すくすくと育ちました。草むしりや水やりで畑に行くたび、どんどん大きくなり葉もふえていくので、またまたおどろきました。

いよいよしゅうかくの日。里いもはほればほるほど、どんどん土から出てきて、みんなでかん声をあげました。ニンジンは残念ながら小さいものもありました。いっしょうけんめいやっても、農業はうまくいくことばかりではないのだと分かりました。

こづゆ作りは、おばあちゃん達に手伝っていただきました。きらいなしいたけも、苦手な里いもも、とてもおいしく感じました。自分達で育て、自分達で作ると、こんなにもおいしいのだとおどろきました。こづゆで使いきれなかった里いもとニンジンは、家に持って帰りました。家の人

にも「おいしい」とよろこんでもらえたから、うれしかったです。

今年の農業科は、おどろきの連続でした。おどろいたり、うれしかったり、毎年ちがった体験をすることが出来る農業科は、本当にすごいと思います。来年も楽しみです。

## 農業科で学んだこと

豊川小学校 五年 新明 真央

五年生になって初めて学習した「農業科」では、いろいろな活動を行うことができました。まず始めにやったのは種もみまきで、その後田おこしや田植え、イオン水散布や稲刈り、そして脱こくなど、わからないこともたくさんあったけど、支援員の只浦さんにいろいろと教えてもらいながら進めてきました。

たとえば、稲を刈る時は一回で刈り取ること、脱こくでは、手がまきこまれないように気をつけることなど、初めて知ることばかりでした。只浦さんは、いつもいろいろな活動のこつや注意することを、ていねいに教えてくれました。

た。毎日苦勞しながら稲を育てているからわかることなんだなあと、感心してしまいます。

私のおばあちゃんも、米作りはしていないけど、野菜を六種類も育てています。私が食べているサラダやおみそ汁に入っている野菜は、ほぼおばあちゃんが育てているものです。だから、いつも感謝して食べています。私は小さいころ、

「この野菜はおいしくないから、食べたくない。」

と、よく言っていました。でも、今の私は別人じゃないかと思うほど変わったと思います。おばあちゃんが育てた野菜をおいしく食べ、毎日元気に生活しています。

私はこの一年で、大切なことに一つ気がつきました。それは、農家の人たちは、毎日こんな大変な作業をし、作物に思いをこめて、人と同じように育ててくれているということです。この一年間の農業科の学習で学び、私は今一粒も残さずご飯を食べています。

「このサラダおいしいね。」

そう、これが今の私です。今は毎日、「いただきます。」「ごちそうさま。」そう言って大切な食べ物の一つ一つの命に感謝して食べています。

私はいろんな人に伝えたいです。農業のすばらしさを。

## 私が思う農業科

熱塩小学校 六年 猪俣 美桜

私は、最初、農業なんてめんどくさい、と思っていた。だって、種をまいたのはいいけど、毎日の水くれや肥料まき、そして収穫。やる事がたくさんあって、大変だからだ。このような理由から、私は農業がきらいだった。

その時の私は、その日の授業に農業科が入っていると、友達と

「めんどくさいね。」

「やりたくないなあー。」

と言っていた。

でも、ある日、支援員さんが言っていた。

「みんなが、給食の時においしい野菜を食べられるのは、自然のおかげなんだよ。」

その言葉を聞いた私は、思った。今までの自分は、なんだったんだろうと。おいしい野菜を毎日食べているのに、自然にも感謝しない。挙げ句の果てには、

「農業の事がきらい。」

と言ってしまった。今、思うと、自然に対して申し訳ない気持ちでいっぱいだ。そんな私だったけど、今では、農業

が大好きになっていた。とくに、米作りは最高に楽しかった。田植えでは、一束、一束、大切に植えた。田んぼの草取りでは、たくさん栄養をもらって大きく、立派なお米に育つように、草をたくさん取った。そして、その中でも一番楽しかったのは、稲かりだった。なぜかというと、田植えをした時は、あんなに小さくて、風にも負けそうだったのに、稲かりの時には、とってもじょうぶな稲に育ってくれたからだ。また、私の願いも叶って、大きく立派なお米に育ってくれた。私はとってもうれしかった。

そして、収穫祭の時においしいおもちや野菜を頂く事ができた。これも、全部自然のおかげだと思う。そして、農業科を通して、人として成長したと思う。

私が思う農業科は、作物を育てる事だけではなく、人として成長し、自然へ感謝する事ができる、最高の教科だと思う。

## 農業科への思い

熱塩小学校 六年 瓜生 琉華

農業とは何か。私は何度か考えた。私が考える農業とは、

感謝・喜び・笑顔だと思う。

私が農業のことを本当に大好きになったのは、ある人に言われた言葉の意味が分かった時だった。その人に言われる前までは、「農業なんてっ」と思っていた。

ある日、私が農業の片付けをしていると、

「農業って一番面白いだろう。」

と声をかけられた。でも、あの時の私は、「別にっ」と思った。

「農業って算数の計算みたいに、答えが決まってるから、何があるか分からなくて面白いからね。」

「だから一つ一つ丁寧にやって面倒を見て大切にしろよ。」

と言われた。私は、意味が分からなかったけど、頭からその言葉が抜けなくて、その意味をその日の夜、考えた。

考えて、その言葉の意味が分かったとき、「ああそう考えると確かにそうだなあ」と思った。なぜなら、作り始めた時はいい調子でも、後から台風の影響でよく育たなかったりすることがあるから、確かにそうだと思う。そう思うと、私もワクワクしてきた。「一つ一つ丁寧にやって面倒を見て大事にしろよ」と言われて、次の農業科学習では、なんだか農業が楽しくて、大好きになっていた。それを教

えてくれた穴澤さんには感謝している。

すると、作物を頂くありがたみや、友達と協力して達成する喜びを知ることができた。

十一月十六日に行った「笑顔の赤飯届け」では、私達が育てたもち米を笑顔で届けに行くと、おいしい赤飯をありがとうと言われた。とても嬉しかった。

私の農業科への思いは、私に農業科の楽しさを教えてくださった穴澤さんや、支援員さんに対しての感謝の気持ちや、美味しい作物を食べられた嬉しさや、みんなで協力した喜びでいっぱい。そのことを忘れないで、中学校でも笑顔があふれる農業をしたいと思う。

心にのこったじやがいも作り

加納小学校 三年 原 志穂

わたしが、のうぎようかで心にのこったのは、じやがいものことです。今年はじめて、じやがいもを育てて、いろいろなことがわかりました。

じやがいもは、あさがおやミニトマトみたいに、たねを

まいて育てるのではなくて、たねいもを切って、はたけにうえたので、びっくりしました。めをいためないようにほうちょうで切るとき、どきどきしました。

二週間くらいでめが出てきました。どんどんせいちょうして、葉っぱが大きくなりました。葉っぱの形は、ミニトマトにっていました。

そして、葉っぱもせいちょうして、大きくなって、花がさきました。じやがいもの花は、星のような形をしています。色はうすむらさき色でした。とてもきれいでした。花がさいてうれしかったのに、花をとらなくてはいけなくなりました。

「花をとらないと、えいようがじやがいもにいけないで、花にいつてしまうからだよ。」

と、先生が教えてくれました。わたしは、くきをおらないように、くきをもつて、やさしく花をとりました。とった花は、はたけにまいて、ひりょうにすることも教えてもらいました。

夏休みになる前、みんなでじやがいもをしゅうかくしました。大きないもがいっぱいとれて楽しかったです。しゅうかくしたじやがいもは、ゆでて、学校みんなにくばって、しおをかけて食べました。給食に出してもらったり、

いもに会で料理してもらったりもしました。みんながおいしいと言いながら食べていたので、とてもうれしかったです。

わたしは、じやがいもを育てて、作り方がよくわかりました。自分で作ることも、作ったものを食べることも楽しいことがわかりました。来年は新しい三年生が入るので、やさいのことを教えてあげながら、またおいしいやさいを作りたいです。

## 農業科で学んだこと

加納小学校 四年 岩下 春夢

ぼくは、農業科の勉強を二年間やって、支えん員の岩下先生にたくさんのことを教えてもらいました。

じやがいも作りで分かったことは、じやがいもは種から作るのではなくて、じやがいもを切って植えるということです。芽が出ているじやがいもを半分に切って、芽が上になるようにして浅くおいて、土をやさしくかけました。三年生の時は、初めて知ってびっくりしたけれど、今年は芽

を切らないように、ほうちょうで切って、上手に植えることができました。

野菜をおいしく作るには、いろいろな世話があることも分かりました。白菜や大根の葉っぱには、青虫や毛虫がいきました。

「おいしいから、虫たちも食べるんだ。」

と、岩下先生が教えてくれました。気持ち悪かったけど、おいしい白菜や大根にしたかったから、がんばってとりました。

しゅうかくの仕方でも教えてもらいました。野菜をきずつけないように気をつけてとることです。じゃがいもは、スコップでだいたいほった後、手でほって探しました。大根は、ななめにぬくとおれてしまうから、まっすぐ上に引っぱります。教えてもらったとおりにぬいたら、きれいにぬけてすっきりした気持ちになりました。白菜は、根元にほうちょうの先を入れて、ざくつと切ります。のこった葉っぱの上で切ると土がつかないのできれいにとれました。

教えてもらって一番大切だと思ったのは、農業は楽しくやるということです。岩下先生は、いつも、

「楽しくやると野菜も大きくなるぞ。」

と言っていました。農業は、たいへんなこともあったけど、

上手に作業ができるようになると楽しいし、おいしい野菜ができるとうれしいです。ぼくは、岩下先生に教えてもらったことを生かして、家の農業の手伝いももっとやりたいと思います。

あいさつには気持ちをこめて

塩川小学校 六年 五十嵐 和奏

「いただきます。」

「ごちそうさま。」

わたしは、この言葉を何の意識もせずに使っていました。でも農業科を学んでいく中でなぜこのあいさつをするのかが分かってきました。

今年の農業科は「大豆」でした。まず、種をポットにまいたのですが、中々芽が出てきません。新しい種をまいてもまた芽が出ません。私は、

「どうしてわたしのは芽が出ないの。」

と思いました。でもそこで私はよく考えてみました。そして、植物も人間も同じなのかなと気づきました。私だって、

「どうしてできないの。」

と言われると、

「それは、人それぞれでしょ。」

と思ってしまう。つまり、人間がそうであるように、植物だって育つものと育たないものがあり、すべてが同じものではないということが分かったのです。だから私は、気持ちだけでも伝わるかなと思い、

「いつでもいいから、早く芽を出してね。」

と声をかけました。すると、次の日、私のポットから小さな芽が出ていました。

「ありがとう。」

人間が言われてうれしいうちに私は気持ちを伝えました。

畑に苗を植えた後も雑草をしつかりと取りました。その成果が出たのか、九月に畑に行って見ると、とても成長した大豆がそこにありました。私はとてもうれしくなりました。

そして分かったことが、「いただきます。」「ごちそうさま。」は、人間とは違う苦労がありながら人間のために育ってくれてありがとうという感謝の気持ちを伝えていているということです。だからわたしはこれから気持ちをもこめて言いたいと思います。

「育ってくれてありがとう。いただきます。」

「命をくれてありがとう。ごちそうさま。」

## 農業の失敗と成功

駒形小学校 四年 大石 舞花

農業をやっている人はすごいです。作物を育てるのはとても大変なのに、おいしい野菜を作ることができるのは本当にすごいと思います。

私の家は、いろんな人から野菜をもらっています。しかも、その野菜がとてもおいしいので、すごく感しゃしています。

私たち四年生も、農業科でスイカを育てました。いたいたスイカのなえを畑にうえ、みんなで協力して水やりや草むしりなどをして育てました。スイカの花が咲いたとき、実ができたときは、みんなとても喜びました。そして、実がくさらないように、鳥とかに食べられないようにワラをしいたり、ワラをかけたりしました。

夏休み中も、みんなでこうたいしながら水をくれました。

そして、少しずつ実が大きくなってきて、夏休み終わりごろにはもうすぐ食べられるまでになりました。

ところが、スイカの実がわれてしまいました。動物のしわざかなと思いました。雨がふって水分が多すぎたのが原因でした。食べる前にわれてしまつて残念でした。私は、農業はむずかしいし、大変なんだと思いました。

でも、大変なことだけではなくて喜びもありました。「赤大玉」という種類のスイカをしゅうかくした時は、本当にうれしかったです。無事にしゅうかくできたからと、食べておいしかったからです。今までに食べたどのスイカよりもおいしかったです。やっぱり自分たちの育てたスイカだからおいしく感じたのだと思います。

このように、育てるのに手間がかかるし、手間をかけても上手いかなということもあるので、農業は大変だなと思いました。だけど、大変なことをのりこえて世話をしたら、おいしい作物が作れるということを学びました。

野菜をくれた人たちは、そういう苦勞をしておいしい野菜を作っていたのかなと思いました。

## 努力や苦勞から生まれるおいしい作物

高郷小学校 六年 中島 千穂

「この野菜、おいしいね。」

「このお米、おいしいね。」

みなさんは、この言葉を言ったことは、ありますか。この言葉を言うのは簡単ですが、言うまでにはたくさん努力と苦勞があります。

今年の九月に今まで私たちが育て、大きくなった大根を収穫しました。さっそく大根をゆでて食べました。するとみんなは、

「この大根おいしいね。」

と、言っていました。私はこのとき種をまいてから、収穫するまでのことを考えていました。野菜は種をまいてから、草をむしるだけですが、大根は、間びきをしたり、土をよせたりと、苦勞しました。私は、大根が好きだけど、大根を育てるのは大変だと感じました。私は大根の収穫はできなかったけど、収穫した友達は、

「深くほらなにとれなくて、むりやりぬくと、折れて、大変だったよ。」

と言っていて、農家さんはこんなに大変なことをやってい

てすごいなと思いました。

お米も同じです。授業では田植えと稲かりしかやってませんが、お米を育てるには、それだけではありません。田植えの時に使っている苗は、田植えをする一カ月も前からハウスの中で育てます。他にも、稲かりまで水の量を調節したり肥料をまいたり私たちが知らない所で、やってくれているのは、支援員さんです。

だから私たちは、支援員さんたちに感謝しないといけません。今年は台風が来て稲がたおれてしまいました。ですが支援員さんは、私たちがやりやすいように、たおれている所を起こしたり他にもいろいろな努力をしてくれました。そうです。私たちには私たちのために努力や苦勞してくれている支援員さんや農家の人たちがいます。だから私たちは、その人たちに感謝をし、作物をそまつにしてはなりません。そして私たちが努力をして恩を返すのです。

## たから物のじやがいも

第二小学校 四年 大森 和佳奈

「わあー、大きいじゃがいもがいっぱい。」

「みてみてこっちにもごろごろいっぱいだね。」

じゃがいもほりの時、大きく成長したじゃがいもを見て本当によろしくなりました。ひとつひとつ作る事が大事なんだなあと思い、いとおしくなりました。ピカピカのたから物みたいに感じました。

五月に前田さんと田中さんに、

「強くおさないでね、じゃがいもがいたむから。」

と、教えてもらい、じゃがいものたねいもを切った方を下にして大事に植え、ふかふかの土をかけました。これからどんなふう to 育つかワクワク楽しみになりました。

芽がでてくきも太くなって緑の葉っぱがどんどん太陽に向かって大きく育つと、土の中のじゃがいもがどうなっているのか、とても楽しみになりました。毎日毎日大きく育って去年のじゃがいも作りの時よりも葉っぱがあおおしいのもっと立っぱに育っているのかなあとうれしくなりました。

しかし、ワクワクしていたけれど草むしりは、とても暑しいし、私の苦手な虫がたくさんいて、「簡単じゃん」と思っていたけれど、根っこが強くてなかなかぬけなかったり、ひっぱっていると虫がいっぱいいたり泣きたくなりました。じゃがいもを育てるととても手間がかかって大

変なんだなあとあらためて感じました。スーパーに行けばいろんな野菜がすぐ買えるけど、そのひとつひとつの野菜が育つまでにいろいろな手間がかかっているんだなあと思うと作っている方たちってすごいなあと感じやの気持ちでいっぱいになりました。

じゃがいもをほる時にはあんなにあおあおしかった葉っぱが黄色っぽくなってじゃがいもほりに近づき本当にあつという間のじゃがいも作りでしたがいろいろな事を知ることができました。

## 手作業でやることの意味

関柴小学校 六年 穴澤 優斗

ぼくは、二年間稲作をやって機械と手作業でやった時の考え方が変わった。

ぼくの家は農家で米を作っている。だが、田植えも稲刈りもほとんどが機械を使ってやっていた。ぼくも少しは手伝っていたが、特に田植えと稲刈りはやることなく、ただお父さん達がやっているのを見ているだけだった。でも、

学校ではほとんどが手作業でやった。最初は機械でやればいいと思っていた。手作業だと危険な時もある。時間も機械の倍はかかる。でも実際にやってみて、大変だったが、友達と一緒に頑張ってやると、最後は楽しい気持ちになっていた。機械でやっていてはこんな気持ちにはなっていないのだと思った。友達と役割を分担して作業をしたり、やる場所を工夫したりしながらやった。確かに時間はかかり、結局終わらなかったが、手作業でやることの大変さと、終わった時の楽しさが分かった。

また、ぼくは支えん員さん達の手ぎわの良さにおどろいた。同じ手作業とはいえ、ぼく達よりも速く正確にこなしていく姿におどろいた。そして、教えるのもすごく上手で分かりやすかった。ぼくは、このような人達が米作りをしているからおいしいお米が出来ているのだと思った。いくら機械でやっているとはいえ、手作業でやる部分も必ずある。その部分を手を抜かず、正確に行っているから、支えん員さんが言っていたように、喜多方の米はおいしいと言われているのだと思い、すごいと思った。

二年間稲作をやって五年の時と六年の時で考え方が大きく変わった。五年の時は、面倒くさいという考えがあった。でも六年になって稲作をやると、確かに大変だったが、楽

しい気持ちになった。だから、これからは、機械をたよらずに手作業でやろうとする心や、何かをする時に適当にやらない心、正確にやる心を持って、これから生活していきたい。手作業でやることの意味を考えながら。

「いただきます。ありがとうございます。」

慶徳小学校 五年 長谷部 歩

「いただきます。」

わたしの大好きなお米は、真っ白くて、つやつやしてきれいです。その美味しいごはんをおなかいっぱい食べると、いつも幸せな気持ちになります。

「じいちゃん、今年もおいしいお米ができてよかったね。」

と毎年言って食べています。わたしは小さいころからじいちゃんのお米で作ったお米で育ってきました。だから、農業科でお米の作り方を学べる事をとて楽しみにしていました。まず最初に「種もみ」をまきました。箱の中に土を入れ、その土の上に種をまきます。そして、土をかぶせます。た

だ土をかぶせるだけでなく、それはまるでおふとんをかぶせるようにそっとやさしく種もみがでないようにするのです。これが意外とむずかしかったです。

そして、種から芽が出て苗になります。観察するたびせただけものびていて、とてもおどろきました。まるで「ねる子は育つ」のことわざ通りでした。田植えでは、ねちよつとした田んぼの中にはだしで入りました。こんなことはめったにないので、そこから足をぬきながら苗を植えるのがとても大変でしたが、楽しかったです。いねかりでは黄色に色づいたたくさんいねが一面に広がっていました。

そのきれいな景色の中で、いねかりが始まりました。人の手でやるのは大変なので機械を使いました。機械は便利で速いけど、そう作はむずかしそうでした。来年は自分達の手でいねかりをして、機械のすごさを実感したいと思いました。米作りにはこんなにたくさんの手間や時間がかかっていることが分かり、本当に大変だと思いました。自分が実際やってみて、米作りをしているわたしのじいちゃんのお持ちがよく分かりました。

「いただきます。ありがとうございます。」

という感謝の気持ちをこれからもわすれずに食べたいと思います。

## 大事に育てたジャガイモとの出来事

塩川小学校 四年 高畑 旬

ぼくらが育てたのは、ジャガイモです。ぼくの祖母がジャガイモを育てていて、よく手伝いをしているので、学校でのいもほりや種いも植えには少し自信がありました。

いもほりの時、ぼくはびっくりしました。それは、生長のちがいがすごかったことです。くきが大きかったり、小さかったりして、小さいのは見えなくなるほどでした。ぼくは、場所や植え方が問題だと思いました。場所によっては日当たりの悪いところもあるし、小さいのは近くの植物に土のえいようを取られているのかなと思いました。植え方も、下にやりすぎたり、あまり土をかぶせなかったりしたのが、生長が悪いのかなと思いました。

スコップや手で土をほったら、少しほっただけで出てきたり、ふかくほらないと出てこなかったりしました。これもまた、植え方が問題だと思いました。

もうほとんどみんなほってしまったので、ぼくははしの方をほってみました。そうしたら、何かがスコップにあたる音がしました。手で土をどかして見ると、そこにはジャガイモがありました。しかも一こじやありませんでした。

ぼくが

「やったあ。」

と言ったジャガイモを取っていくと、他の人がそれを見ておしよせてきました。ぼくはすぐうれしかったです。それは、せっかく育ったのにほってもらえなかったら、きつと悲しいと思ったので見つけてやれてうれしかったです。その数日後に、ジャガイモをカレーにしました。ジャガイモの他にも、肉や玉ねぎに、にんじんなどの具材がありました。どれもおいしかったけど、その中でもジャガイモがひときわおいしかったです。目をつぶってでも、ジャガイモだってわかる味でした。

こういう体験は大人になっても役立つと思うので、これからも一生けん命おいしい物を育てて、おいしい料理に変身させたいです。

ミミズのありがたみ

姥堂小学校 三年 船田 稀絆

「そういえば、今日は、六月に植えた里いもとニンジン

しゅうかくするんだよね。」

とクラスの友だちがぼくにいった。

今日は、ぼくがずっと楽しみにしていたしゅうかくの日だ。

そして、しゅうかくがはじまるとすぐに、女子のいる方から、

「キヤー。」

という声が聞こえた。ぼくは、どうしたのかなと思って見に行くと、そこにはすごく太いミミズがいた。その時、ぼくは思い出したことがあった。じいちゃんが言っていたことだ。

「ミミズは、土をきれいにしてくれるんだ。ねっこのいらぬ部分を食べてくれんだぞ。」

ぼくは、じいちゃんの言葉を思い出して、

「そうか、だから、ミミズや他の虫は気持ち悪いと思われがちだけど、こののう業という世界には、かかせないそんざいなんだなあ。ミミズ。ありがとう。」とぼくは、心の中で思った。

里いもと終わると、数はざっと百個はあった。「だから、ミミズや他の虫は大切なんだ。」と、また思った。

その里いもは、十月二十日に、お母さんやおばあさんが

学校に来て、みんなで皮をむいてくれた。皮をむいている間に、ぼくたち男子はかまどづくりをしていた。かまどのブロックはすごく重くて、一りん車を使って運んだ。里いもとかまどは、次の日のいもに会で使われるのだ。

次の日、学習発表会が終わった後、なべに里いもを入れていもをみんなで作った。そして、食べてみると、家族のみんなが、

「おいしいね。」

とぼくにいつてくれた。ぼくはとてもうれしくなり、「よし、来年もおいしい野菜を育てるぞ。」と心の中で強く思った。そして女子にミミズのすごさを教えて、少しでもかわいく思ってもらえるようにしよう。



## 平成 29 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール審査会

### 【特別審査員】

関東学院大学教授  
喜多方市教育委員会教育長

(敬称略)

佐藤 幸也  
芳賀 忠夫

### 【審査員】

喜多方市立熱塩小学校長  
喜多方市PTA連絡協議会長(塩川小学校 PTA 会長)  
福島県会津農林事務所喜多方農業普及所経営支援課長  
福島県会津農林事務所企画部地域農林企画課 主任主査  
JA会津よつば いいで地区本部 地域農業振興課長  
喜多方市小学校農業科支援員  
喜多方市農業委員会委員  
喜多方市産業部農業振興課長  
喜多方市教育委員会学校教育課 主幹・指導主事  
喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事  
喜多方市教育委員会学校教育課 農業科担当

泉 光洋  
小林 修  
薄 真昭  
松葉 隆幸  
菊地善一郎  
山田 義人  
佐原 裕司  
大堀 邦英  
五十嵐博也  
中村 豊子  
久保 幸恵

### 編集後記

ある日、静岡で学ぶ大学生から、「喜多方市で取り組んでいる農業科について質問したいのですが・・・」と、電話がありました。卒論のため「食農教育」を調べていたところ、本市の取組を知ったそうです。彼女とのやりとりの中で印象的だったのが、『農業科』を通して育った食べ物や生産者・調理してくださる方々への感謝や尊敬の念、友達や周りの人への協力・思いやりの気持ち、小学校卒業後も引き続き忘れずに生活していることなどは分かりますか。」という質問でした。中学校訪問を通しての私の印象としては、「もちろんです。」と自信たっぷりに言いたいところですが、その裏付け資料はありませんので、「残念ながらそこまでは・・・」と答えました。でも、私の実感は間違っていないと思っています。

今年は、私も含めて審査員が何名も替わりました。特に初めての方からは、「子どもたちの表現力に驚いた」「子どもたちの見ている観点がすごい」などの高評価をいただきました。また、甲乙付け難い中にも、「情景が思い浮かぶ文章」「心がわくわくする作品」というキーワードが審査会の中で聞かれました。きっと、来年も全国各地から農業科の視察に来てくださる方々がたくさんいらっしゃると思いますが、この作品集を読んでもいただければ喜多方市小学校農業科のすばらしさが伝わるはずです。この作品集は、これからも何よりのお土産になることでしょう。

喜多方っ子のみなさん、今年取組の中で芽生えた疑問「どうしてかな？」を追究して、新たなステージにレベルアップしてみませんか。そして、喜多方市の農業科をみなさんの力でもっともっと発展させ、広く発信してみませんか。それだけの価値と可能性があることを、各分野の方々の関わりを通して実感することができた1年間でした。

(学校教育課 課長補佐・指導主事 中村 豊子)

平成 29 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

平成 30 年 2 月 発 行

喜 多 方 市 教 育 委 員 会